第4回日本赤十字看護学会学術集会 テーマセッション WI

実践知を活かすアクションリサーチ

Action Research —Integrating Practical Knowledge and Wisdom for Improving Nursing Care—

 司会
 野口
 填弓
 NOGUCHI Mayumi
 (日本赤十字広島看護大学)

 話題提供者
 野口
 填弓
 NOGUCHI Mayumi
 (日本赤十字広島看護大学)

 松永
 佳子
 MATSUNAGA Yoshiko
 (日本赤十字広島看護大学)

 栗栖
 稲子
 KURISU Ineko
 (広島記念病院)



野口真弓

看護学は実践の科学であり、研究はその成果が知識として示されるだけではなく、看護実践を変えなければ意味がない。看護学の研究方法として、実験室での測定や看護実践のある部分の現象を捉えての詳細な記述などがあるが、そこから得られる理論を実践に活かす方法が求められている。アクションリサーチは、看護実践が行われている「場」全体を捉えて、そこで働く看護者たちが問題と思う状況に改善をもたらすために、その状況にかかわっている人々のあいだに終わることのない学習サイクルを活性化させる方法であり、それは理論と実践をつなぐためにも有効である。

アクションリサーチでは、「問題の特定」、「データ収集」、「要因の明確な表現」、「計画された変更」、「データ分析」、再び「問題の特定」という学習サイクルを活性化させる。それは、ある病院のある病棟という特定の「場」に密着して行うため、その場でのケアの改善にはすぐれているが、場が異なれば事情も異なるのでアクシ

ョンリサーチは再現性が低いという批判がある。 しかし、看護実践の場において理論と実践をつ なぐためには場への密着は不可避であり、それ によって看護実践が改善されるのであれば、必 ずしも再現性を方法論の最重要な評価基準とす る必要はないともいえる。

このセッションでは、日本赤十字広島看護大学の野口眞弓、松永佳子、松宮民恵、広島記念病院の栗栖稲子、川下静、永嶋裕美子の6名で行っている母乳育児に関するケアの質の向上を目指した「母乳育児を継続させるためのアクションリサーチ」を話題提供の材料に用いる。まずは野口がアクションリサーチの簡単な解説を行い、次に松永がアクションリサーチを用いね年間の研究計画の概要を説明し、最後に実際に研究を行っている病棟の主任である栗栖からスタッフの研究への巻き込み方などを報告する。これらの話題提供をもとに、アクションリサーチを看護実践の場でどのように活用できるかを議論したい。

看護におけるアクションリサーチ

野口真弓

アクションリサーチは、心理学者のLewinによって始められたものであり、社会体制についての知識を作りだすと同時にその変化を企てる方法としてアクションリサーチという用語は1944年から用いられてきた。アクションリサーチの起源は、社会心理学、自然科学、組織に関する学問、社会的な計画にあるが、それぞれの学問領域により用語も異なり、異なった方法が用いられるなどの混乱がみられる。

そこでアクションリサーチの特徴を明らかにする試みがなされ、HolterとSchwart-Barcott (1993) は、①研究者と実践者の協力、②実践的な問題の解決、③実践の変化、④理論の構築をあげ、Lathlean(1994)は、①介入、②状況密着、③統計よりむしろ理論的な結果を生み

出すことを挙げている。この結果からも、アクションリサーチの本質的な特徴は実践が行われている「場」に密着し、実践の変化を企てることといえる。

アクションリサーチにはいくつかの分類があり、Lewinはアクションリサーチを①同じような社会状況における介入効果を明らかにするための「実験的」、②類似したグループに連続した研究データを蓄積することでグループ行動の一般的な原則を漸次的に発展させる「経験主義的」、③問題改善をするために測定しアクションを提案する「診断的」、④問題を解決するためのアクションに参加者として加わり、地域住民とともにアクションの計画をする「参加型」の4つに分類した。看護学の領域では Holterと

Schwartz-Barcott (1993) が、理論枠組みに基づいた特定の介入をテストする「テクニカルアプローチ」、研究者と実践者が協力して行う「ミューチュアルアプローチ」、関心のある問題を理論と実践をつなぐように解決する、あるいは実践者の共通意識を高揚させることで実践を改善させる「エンハンスメントアプローチ」の8つに分類した。

さらにHartとBond (1995) が、教育的基 盤、グループに属する個人、問題の焦点、変化 の介入、改善と関与、周期的な過程、研究の関 係と協力の程度という7つの視点から、アクショ ンリサーチを「実験的」、「組織的」、「専門職的」、 「エンパワーリング」の4つに分類した。これら の発展の過程は、教育により測定可能な変化を 明らかにする「実験的」、生産抑制などの組織の 問題解決に用いられる「組織的」、研究に基づい た実践を発展させることで新しい専門職の地位 向上を目指す「専門職的」、最も傷つきやすいグ ループに非圧迫的な立場をとる「エンパワーリ ング」の順である。非常に大まかにいえば、初 期の方法ほどより研究に焦点を当てており、最 近の方法はより行動(アクション)に焦点を当 てていることになる。

アクションリサーチの分類の視点を用いて比較すると、教育的基盤は「実験的」、「組織的」では再教育という社会的管理や操作的な意味合いが強いが、「専門職的」では内省的な実践、「エンパワーリング」では意識高揚となる。グループに属する個人は、「実験的」では測定の目的に従い研究者により管理された人のグループ、「組織的」では管理者と労働者の混合グループ、「専門職的」では専門職者のグループ、「エンパワーリング」では自己選択的、自然な境界のあるグループとなる。このように、同じアクションリサーチでも、その目的とするものによりその具

体的な方法に違いがあることが示される。

看護学の分野でアクションリサーチを用いた 論文は1995年以降増加しているが、他の学問領域と比較してアクションリサーチを取り入れた 時期に遅れがある。学問的確立を目指した看護 学では必ずしも数量的データを得られるとは限 らないアクションリサーチを用いることに抵抗があったのであろう。

最後にアクションリサーチの倫理的問題に触れておく。アクションリサーチでは、実験型デザインの実験者、応答者という研究関係より、実践者、共同研究者という関係で何らかの変化を起こすものであり、主研究者と共同研究者との研究遂行における影響力の違い、アクションリサーチにより予測される変化を説明できないなどのインフォームド・コンセントの問題がある。秘密保持では、論文を発表する際にデータとして使うことの可否は確認できるが、そのデータが残ることにすべての共同研究者が心地よく思っているかどうかという問題もある。

文献

Hart, E. & Bond, M. (1995). Action research for health and social care: A guide to practice. pp. 36-58, Philadelphia, Open University Press.

Holter, I. M. & Schwartz-Barcott, D. (1993).

Action research: What is it? How has it been used and how can it be used in nursing?. Journal of Advanced Nursing, 18(2), 298-304.

Lathlean, J. (1994). Choosing an appropriate methodology. In J. Buckeldee & R. McMahon (eds.), The research experience in nursing. pp. 31-46, London, Chapman and Hall.

母乳育児を継続させるためのアクションリサーチ計画

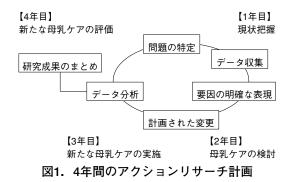
松永佳子

アクションリサーチ計画を示すことでの期待について述べる。研究者と実践者が協力して研究を進めるミューチュアルアプローチを用いたアクションリサーチは、今後、看護研究の中で求められる方法となるであろう。現在、そのアクションリサーチを教員と混合病棟で働く助産師3名が中心となって実施している。そこで、現在実施している「母乳育児を継続させるためのアクションリサーチ」の4年間の研究計画を説明することで、アクションリサーチの実際の進め方や、その具体的な方法を示したい。そして今後、研究者と実践者が共に研究を行うきっかけになることを期待したい。

次に、アクションリサーチ計画の実際(図1) について説明する。

①問題の特定とデータ収集

母乳育児を希望している母親が母乳育児を確立し、さらに継続していくことは容易ではないという現状がある。この現状を「問題として特定」し、この問題を解決するための1つのアプローチとしてアクションリサーチを実施する。まずは、なぜ、母乳育児を確立し、継続させていくことが容易ではないのか、という要因を特定するために「データ収集」を実施していく。これが1年目に行う現状把握となる。現状把握をするために、①看護者への聞き取り調査、②ケアの受け手へのアンケート調査、③業務量調査、④退院時の母乳育児に関する実態調査を実施した。②要因の明確な表現



2年目には1年目に収集したデータをもとに、 実際に提供している母乳育児に関するケアの検 討をすることで、なぜ母乳育児を希望する母親 が母乳育児を確立し、継続していくことが容易 ではないのかという「要因を明確に表現」する という段階に進む。この際、1年目で収集したデ ータをもとに、病棟スタッフはどのような母乳 ケアを提供していきたいのかを含め、母乳育児 に関するケアについて十分話し合うことが不可 欠となる。つまり、客観的、主観的データから 明らかになったことをもとに、病棟スタッフは どのようなケアをしたいのかという希望と、現 状の体制のなかでなにをすることができるのか という制約をすり合わせ、現状を改善しうるで あろう新たなケアを主体となって話し合う。そ の際、教員は、得られたデータ分析および解釈、 さらに病棟スタッフの思いを組み込んだケアの 模索を共に行う。このような作業を通じて、母 乳育児に関するケアの障害となる要因を明らか にし、どのように母乳育児に関するケアを改善 するかということを明確にしていく。

③計画された変更とデータ分析

スタッフ全員の話し合いの結果、決定された 新たな母乳育児に関するケアを「計画された変 更」として3年目に実施する。この際、教員は、 2つのデータ収集をすることになる。1つ目は、 新たな母乳育児に関するケアの実施をしていく 過程において、そのケアが病棟の中にどのよう に組み込まれたのかという変化の過程を明らか にするためのデータ収集である。2つ目は新たな ケアがある程度軌道にのった段階で、1年目と同 様の方法で、データ収集を再度実施し、現状を 把握し直すためのデータ収集である。これら2つ のデータ分析を行うことで、変更されたケアの 評価を行う。この部分を4年目に実施し、次の新 たな「問題の特定」へとつなげていくことにな る。このように限りない学習サイクルの活性化 に教員が関与することになる。

以上、アクションリサーチの具体的な流れに ついて事例を通して説明した。最後にアクショ ンリサーチにおける教員のあり方についてまとめてみたい。教員は、スタッフを脅かす存在になってはならない。そこで、教員は調査結果のみから問題点を指摘するのではなく、病棟スタッフと密に関わる時間を持つことで、病棟スタ

ッフはどのような方向に向かいたいと考えているのかを把握し、それを支持するように努める。このような立場で病棟スタッフと共に研究を進めていくことがアクションリサーチにおける教員のあり方なのではないだろうか。

ミューチュアルアプローチの実際

栗栭稲子

アクションリサーチを行っている研究の場は、 産科、婦人科を中心とした50床の混合病棟で、 手術件数の増加、入院患者の重症化などにとも なう煩雑な業務に加え、分娩件数は年々増加し 現在は年間600件を越えている。ここでは、13 名の助産師、10名の看護師、1名の看護助手が 日々の患者ケアを行っている。

平成14年に日本赤十字広島看護大学の教員から研究の申し入れがあり、病棟の8名の助産師が中心となって共同研究をはじめた。アクションリサーチの手法としては、ミューチュアルアプローチを用いることとし、その導入のためにはスタッフ全員が今回の研究内容を理解することが不可欠となる。そこで、教員がスタッフに具体的な研究の説明を行い、スタッフがアクションリサーチという聞きなれない言葉を理解したうえで、スタッフから研究参加の同意を得て研究を進めていった。

研究を円滑に進めていくためには、スタッフと教員との交流を深めることも大切である。そのため、教員は母乳育児に関するケアの場に参加し、実際にケアを経験するばかりではなく、多くのスタッフと関われるようにした。また、3名の助産師と教員の研究主要メンバーは、月回程度の会議をもち、スタッフの協力の程度や研究の方針を話し合ってきた。さらに、スタッフが研究の進行状況を把握し、それに対する意見を述べることができるように、①朝の申し送り時での研究主要メンバーの話し合いの結果報告、②連絡ノートを用いたスタッフへの伝達、③月1回の病棟会での研究の具体的な方法についての説明およびそれに対する意見交換などの方法を

とった。

母乳育児に関するケアの実態を把握するために、①教員によるスタッフへの個人面接、②ケアの受け手へのアンケート調査、③業務量調査、④退院時の母乳育児に関する実態調査を行った。ケアの受け手へのアンケート調査では、研究主要メンバーでの意見交換を繰り返し、実践における問題とその原因を特定できるようにアンケート内容を作成した。その結果、母乳育児に関するケアの問題点が少しずつ明確になるという成果を得た。

また、ミューチュアルアプローチという方法をとることによって、少しずつスタッフ個々人の心に変化の兆しが見えてきた。スタッフは、「患者様は、母乳育児に関するケアに満足しているのであろうか。」、「他のスタッフは、現状のケアに満足しているのだろうか。」、「患者様に満足してもらうためには、業務の何を改善すべきか。」ということを考えるようになってきた。

今後は、研究結果から明らかになった問題点をスタッフ全員で共有する必要がある。この共有化の作業をとおして、研究に対して協力的ではあるが積極的ではなかったスタッフが、病棟のケアシステムを変えたいという願いを抱き、研究に対してより積極的にかかわることを期待する。以前と比較して病棟全体の業務量は確しまる。以前と比較して病棟全体の業務量は確しない状況となっている。助産師と看護師が働く混合病棟での母乳育児に関するケアを改善するためには、助産師、看護師それぞれが得意とする分野の仕事が充分できる体制はどのような簡ものか、どのケアに重点をおき、どのケアを簡

略化するかなどのケアシステムに対する検討が 必要となる。また、助産師、看護師それぞれが不 得意とする分野の克服のためには、スタッフ間の 勉強会、経験が充分でないスタッフの臨床判断 能力を高めるための症例を取り上げたカンファ レンスなどスタッフ教育を強化する必要もある。 アクションリサーチを行うことで、スタッフ 全員が業務改善に対する意識をもつことができ、 さらに母乳育児に関するケアの質の向上へとつ ながることを期待する。さらに、このことが患者のケアに対する満足を高め、助産師、看護師の 仕事の満足へとつながっていくことを期待する。

この発表は、科学研究費基盤研究 C (課題番号 14572308) の交付をうけ、日本赤十字広島看護大学の野口眞弓、松永佳子、松宮民恵、広島記念病院の栗栖稲子、川下静、永嶋裕美子が共同で行っている「母乳育児を継続させるためのアクションリサーチ」をもとにおこなった。

